

電気機械器具製造業

検定挑戦と技能五輪で技能士の腕を高める

7-27 日立アプライアンス株式会社 清水事業所

静岡県の技能五輪常連企業

静岡県静岡市の日立アプライアンス株式会社清水事業所は、平成 18 年に株式会社日立空調システムと日立ホーム&ライフソリューション株式会社とが合併してできた企業である。店舗・オフィス用の空調設備から、環境配慮型製品であるエコキュートなどの住宅機器までを幅広く扱っている。空調・冷凍・住宅機器の世界最先端水準の工場として、国内のみならず、アジア、ヨーロッパ、南米などにも工場を持ち、日々、品質の高い製品を作り出している。

また、同事業所は技能五輪選手輩出企業としても有名である。技能五輪には昭和 41 年から選手を大会に送り出し続け、五輪参加経験者は 89 名にのぼる。高機能・高品質の製品とそれを生み出す人材の育成にも注力している企業である。



研修の一環として製作した
ミニSLと原塚指導員

ワンステップ上を目指すための目標としての検定

日本トップレベルの人材を揃える同社にとって、技能検定とはどのような位置付けなのだろうか。また、技術の結晶としての価値を内外に示す技能五輪の存在とはどのようなものなのだろうか。総務部の佐藤主任と原塚指導員に伺った。

「技能検定は、向上心を持ち新しい知識や技能の習得を目指す上で 1 つの目標になっています。」

また、新たな技能習熟と品質 ISO 資格認定に有効な手段である社内資格取得のための取組や、各種社内研修と合わせ質の高い人材を育成しています。」

二人の発言は、新しい知識や技能を身に付け、同社のものづくり力を支え、また、五輪での活躍を通してブランドの向上に貢献している人材によって裏付けられている。



敷地内には、技能検定合格者の
一覧表が掲示されていた

キャリアモデルとしての五輪組

技能士たちは実際の現場で活躍している。日々の現場での達成感も技能士のモチベーション向上に役立っているが、日立アプライアンスが国内外にその名を知らしめている技能五輪での活躍も、次期出場選手や日常業務として品質確保や高効率生産に携わる技能士たちへのモチベーションの向上に大きく役立っている。

「五輪出場選手のような卓越した技能を持つ人材が社内の各部署にいて、彼らが多くの後輩の目標になり、将来的には先輩として新人など後進を育てていってくれる現場のリーダー（昔は親しみをこめて「オヤジ」と呼ばれていた）になって欲しいと思いますね。」（佐藤主任）

また、最近では女性の技能士の台頭も著しいとのこと。人材の多様性を踏まえ、これまで以上に技能士個人の特性を活かしたスキルアップが、世界最先端水準の技術維持と向上に必要不可欠である。今後、日立アプライアンスにとっては、そこで働く技術者のモチベーションをいかに高めていくかが課題となっている。

手作業の重要さが残る分野の技能検定が重要

最近の生産現場では機械化が進み、技術者が実際に機械を扱って部品を加工するということが少なくなってきたが、まだ手作業の重要性がある分野は残っている。

「その分野の技能を問うような検定制度を作ってもらうことも必要ですね。また、現状の生産現場では一部の組立業務（セル生産）を除くと、個人で何かを作り上げるということは少なくなってきました。チームで何かを作り上げることを技能検定の試験内容に盛り込むのも良いかもしれませんね。」（佐藤主任）

佐藤主任本人も機械加工の技能士であり、技能五輪に出場したことがあるだけに、技能検定の良さと要望についての指摘も現場感にあふれたものだった。

日立アプライアンス株式会社 清水事業所

- | | |
|----------------|--------------------|
| ➤業種：電気機械器具製造業 | ➤創立：平成18年 |
| ➤住所：静岡県静岡市清水区 | ➤従業員：1,531名 |
| ➤代表者：事業所長 花田正道 | ➤技能士：184名（09.10時点） |

技能士へのインタビュー

佐藤 道雄氏（59 歳） 1 級機械加工技能士

原塚 義次氏（57 歳） 特級機械加工技能士



選手、指導者としてのキャリア

昭和 41 年から技能五輪に出場している日立アプライアンス清水事業所。主に企業サイドから人材育成や技能検定の重要性についてお話を伺った佐藤主任も昭和 45 年に千葉で開催された国際大会に出場するために技を研鑽したという過去を持つ。また、原塚指導員も入社 2 年目の昭和 46 年に技能五輪に出場した他、日立製作所が開催する全社技能競技大会で優勝している。二人とも、キャリアの多くを技能五輪選手や、選手を育成する指導員として過ごしてきたが、現場での業務も経験している、現場のプロフェッショナルともいうべき技術者である。

幅広い製品を扱うために求められる対応力

日立アプライアンス清水事業所では、オフィスや店舗、ビル用の空調機器、一般家庭における住宅機器を作っているため、それらを作り出す機械である各種設備の取り扱いや、金属などの材料を加工することについての専門的な知識が要求される。例として生産技術の現場では、製品を加工するための道具（治具）を製作する必要があるが、加工する材料や、加工方法は毎回異なる。したがって、治具を作り出す技術者には理想とする加工工程や切削諸元および工具などの選定を自ら考察し、実際に作り出すという対応力の高さが求められることになる。

特級機械加工技能士の原塚技能士は「対応力は日々の現場や、先輩からのアドバイスなどからの影響が大きいと思います。対応力がついてきたと感じたのは 30 歳ぐらいの時。それがいわゆる「若手」と「ベテラン」との分かれ目なのではないでしょうか。」と語る。



フライス盤の先端につける多様な工具
加工するものにあわせて使い分ける

技能士としてのブランドを確立する技能検定

佐藤主任、原塚技能士ともに機械加工の 1 級、もしくは特級技能士である。実際の現場業務とのギャップもあるという技能検定の利点にはどのようなものがあるのだろうか。

「特級の検定に合格したときはやっぱり嬉しかったですよ。それまでやってきたことが認められたという感じがしましたから。自分の目に見えない技能が技能士という形になるところが良いと思います。」（原塚指導員）

「やはり、社内外への PR につながるのがメリットだと思います。会社として技術力がどれだけ高いかを示すことにもなります。また、後輩を育成する際、指導内容に説得力を持つことができるため、より深く、より具体的に理解してもらうことにもなると思います。」

何事においても理由と背景を分かりやすく教えられることは、言語化しにくい技能を伝えていく上で、非常に重要だと考えています。」（佐藤主任）



時間内で自分の力を出し切ることが求められる

職人として自分を PR していくことの重要性

佐藤主任、原塚指導員も今は多くの若手を育てるベテランの技術者である。二人が今後の日本のものづくりを支えていく人材に対し、持っている思いとはどのようなものだろうか。

「若手には少しでも自分が持っている技術を伝えていきたいと思っています。日々『このオヤジは凄いつ』っというのを見せる必要があると思っています。ものづくりに携わる技術者としてのロールモデルとして今後も働いていきたいと考えています。」（原塚指導員）

「どんな技術者でも自分にアピールするものがないと駄目。今後、会社生活を送る中で、業務上の誇りをどうアピールしていくかを考える必要があるのではないのでしょうか。その 1 つの表現の方法が技能検定だと思います。そういう意味で、若手の技術者にも、どんどん検定に挑戦してもらって、目に見える形で実績を蓄えていって欲しいですね。」（佐藤主任）